

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsunshin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル館ケ谷九〇四 電話(03)3337714649 FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言■

柏崎原発と中越沖地震

原野人……2

ナガサキからヨコスカへ「改憲」に抗して……4

―第二八回 全国地区労交流会へのお誘い―

軍人から革命家へ……5

―ベネズエラ革命の現段階(中)―

自民支持基盤「崩壊」明らかに 滝野 忠……8

―〇七参院選の結果から―

何としても勝利をつかむ! 佐久間 誠……11

―五月・六月行動から最終局面の闘いへ―

JR西日本 尼崎事故はやはり運転手の責任! ……13

読者からのおたより ……14

# 旬刊 社会通信

NO. 1006

二〇〇七年八月一五日号

二〇〇七年八月一五日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## 柏崎原発と中越沖地震

## 地震で鮮明になったこと

中越沖地震を受けた柏崎刈羽原発は多くのことを白日の下にさらした。

田辺栄作さんや芳川廣一さんをはじめ地元の方々は、地質専門家等の協力も得て当初から、予定地のすぐ近くに活断層があること、直下にもありそうなことを、反対運動の根拠の一つとしていた。東電は炉心からかなり離れているものだけの存在を認めたり、断層の長さを短いものとしたり、活断層をもう動くことのない死んだ断層だとしていたり、という態度であった。「想定外」の地震だとする東電の言い逃れが許されるわけがない。活断層上に設置してならないことは常識であり、国の方針でもあった。

東電に劣らず責任重大なのは国家だ。政府・経産省（旧通産省）は、東電の申請書通りに断層を評価し、さっさと設置を許可しただけではない。自民党等の政治家と一緒にになって、設置を促進してきたのだ。東京高裁等もそれを助けた。今日の国家とは何かを如実に示している。いまさら経産大臣などが東電をいさめてみせるのは茶番に過ぎない。原子力産業をはじめ大資本家とその国家にとっては、当面の利潤こそ大事であり、あとは野となれ山となれだ。庶民の安全や暮らしは二の次だ。

人を縮減（合理化）しすぎて、消火訓練をつんだ消防組織すらなかったのは論外だ。緊急停止した原発で、排気塔から放射能が検出された後も、排風機を止めなかったことが「マニュアル違反」で労働者の責任かのような主張も、相変わらずだ。建屋内で作業する者にとって、放射能濃度はたちまち健康と命に直結する。「想定外」の揺れの後で、内部の換気を簡単に止めることができよう。

建屋の地階等には、あちこちの装置から漏れ出した水が雨水も混じって大量にたまっている。多量の水に希釈されながら海へ排出された水の放射能の濃度は低いとされるが、今後排出される放射能の絶対量が懸念される。

## これからの問題

公表された六〇件は、ほんの序の口に過ぎない。原子炉のふたや炉心構造物を吊り上げるのに使うクレーンが破損した。それぞれの炉内がどうなっているかは予断を許さない。制御棒は脱落していないか。脱落がなく、きちんと停止していても、核燃料は崩壊熱を出し続ける。それを冷却するための一次冷却水は十分に供給できているのか。そのための非常用電源は無事なのか。ジーゼル発電機に故障はないか。変圧器が火災等で破損したために外部からの電力は利用できないとすれば、細い綱渡りだ。

炉内で加熱された一次冷却水を冷やすのは、海水の二次冷却水だが、少なくとも四号機ではその供給配管が破裂して、海水ポンプを止めざるをえなくなった。各炉心の温度上昇、マルチダウンへの危険はどのように確実に回避されているのか。

それら以上に懸念されるのは、炉壁の配管接合部や周辺配管や機器の傷(いた)みだ。「想定外」の大きな揺れによって、傷みや歪(ひず)みが生じたり、局部的に劣化している可能性は大きい。超音波検査やX線検査でも検出できない傷みもある。

「想定外」の事故故に連なるだけに、安易な運転再開は許されない。

地震列島上に一七カ所、五五基の原発は、いずれも似たような状況にある。原発だけではない。使用済核燃料の再処理工場などが造られることになったとき、下北半島の沿岸には一〇〇kmにも及ぶ活断層が走っているのではないかと、関正さんと追及したが、企業側が簡単な音波探査をただだけで、ないことにしてしまっている。陸地のボーリング検査は本数が少ないし、深さも足りない上に、どの原発等も海岸なのに、海底の調査は極めて不十分なままだ。

### 原発は不可欠か

どの新聞紙やテレビでも、「エネルギー自給率がわずか四%の日本にとって原発は必要不可欠だ」とする前提で論じられている。地球温暖化防止にも不可欠だとされる。原発での核分裂エネルギーの七割は、海水を加熱するのに使われていることも、煙突から排出されるのは二酸化炭素ではないが、もっと厄介な放射能であることも、事故の進展によってはチェルノブイリのような悲劇になることも語られない。

原発を止めても、休止中あるいは低稼働率の火力や水力をフルに活かせば、当面は十分だが、この際、原発はやめ、風力を筆頭に、太陽光、中小水力、潮力等の推進に転換すべきだ。

NEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)資源エネルギー庁(所管)が作った『風況地図』によっても、島国・山国である日本の風力発電の潜在能力は大きい。標高一五〇〇m以下の適地には二億三千万KW程度の風力発電設備が可能である(稼働率は別として)。これは一〇電力会社と電力卸会社の総発電設備に相当するものだ。原発は五千万KW規模だ。NEDOは省いているが、実は標高一五〇〇m以上の山岳地帯には常時風の吹く適地が多い。そこには電力会社の高圧送電線が走っている。風力発電を高圧線に沿って山岳地帯に多数つくり、高圧線に接合(技術的には難しいことではない)すれば、低地の適地とあわせて風力だけでまかなうことすら不可能ではない。

原発の新設はもとより、被災原発を修理・改造したり(直下に活断層の存在が鮮明になってもまだ廃止しないのか)、原発の耐震強度を大幅に上げるなどの工事は、高くつくし、所要期間も長い。累増する放射性廃棄物もどこまで高くつくことか。

それに比べれば風力発電の建設期間は短く、建設費は安い。だが庶民を犠牲にして目の先の利潤ばかりを追う大資本家達とその国家に、「原子力立国計画」(『科学的社会主義』四月号参照)を捨てて、このような転換をすることができ得るであろうか。

(原野人・東京都多摩市)

# ナガサキからヨコスカへ 「改憲」に抗して

―第二八回 全国地区労交流会へのお誘い―

小泉構造改革路線によって作り出された雇用不安と「格差社会」は深化し、大きな社会的問題となつています。安倍自・公政権はこうした社会的不安を背景にして国家主義を強化し、『戦争をできる国』への総動員体制へとむかっています。

自・公政権の数の横暴は教育基本法改悪に始まり、国民投票(改憲手続法、米軍再編特措法と悪法を強引に成立させる一方で、国民大衆の求める生活の改善・安定、社会的格差の是正などには欺瞞的政策で応え、官僚や政治家の腐敗・不祥事は隠蔽を続けています。そして「改憲」への条件整備を着々と進め、自民党参議院選挙公約では二〇一〇年「改憲」発議が登場するに至っています。

また、労働現場をめぐる状況も予断を許しません。「自己管理型労働制」などと称し、成果主義と賃金格差の拡大、労働者の権利剥奪を正当化する労働法制改悪の動きも依然として残っています。

かつてない厳しい情勢下、だからこそ私たちが進めてきた地域労働運動の役割は大きく、その真価が問われています。労働者の権利確保はもとより、平和と人権の確立を求めて地域住民とともに運動を前進させましょう。全国交流会はそのための貴重な場です。全国各地でのさまざまな課題、運動の経過、闘いの成果を持ち寄り交流を深めましょう。

横須賀は戦前からの軍都であり、今は日米軍事一体化の最前線です。第二五回沖縄開催以来の継続課題である反戦・平和運動がまさに求められる地です。そしてまた、アスベスト被害を告発し、地域課題へと発展させた造船労働者の闘いと地域共闘も息づく街です。現地地区労として、交流会成功にむけて精一杯努力をいたします。

全国から多くの仲間の皆さんのご参加を期待して、交流会への呼びかけと致します。

時期 九月十五日(土)～十六日(日)

場所 横須賀市 セントラルホテル(京急横須賀中央から徒歩二分)

事務局 三浦半島地区労働組合協議会(電話 046-822-1850)

内容(一日目) 十五日(土) 十三時～

「住民投票実現を求めて：原子力空母配備反対の地域共闘の運動」

講師 吳東正彦氏(弁護士、全国連絡会共同代表)

「アスベスト問題と労働者 横須賀の取り組み～全国の課題」

講師 古谷杉郎氏(石綿対策連絡会事務局長)

「全国からの報告」①米軍再編・基地問題 沖縄からの報告、②団塊の世代の組織化へ、  
神戸・熟年者ユニオンの組織と活動、③佐野地区労における労働相談、④四国での地区労運動

内容(二日目) 十六日(日) 九時～

◇分科会、分散会

① 地域労働運動の現状と課題：分散会

② 護憲、反戦・平和闘争

③ ユニオン運動、争議支援

# 軍人から革命家へ

―ベネズエラ革命の現段階（中）―

## チャベスという人

つぎにチャベスという人物についてです。チャベスは一九五四年生まれ。本人は中産下層の出と言っていますが、教員の家庭です。中産階層の上といったところでしょう。第二次世界大戦前の日本に当てはめればよくわかります。教師はインテリゲンツィアの下層、中層です。

当時の日本の支配階級は財閥を中心とする大企業、地主、高級官僚、インテリゲンツィアの上層に位置したのが①大学教師、②弁護士・会計等の専門家、③医者、④高級技術者、⑤作家・評論家、⑥芸術家といった職業の人びとでした。今のベネズエラで支配階級に属するのは地主、そして国営企業の管理者、官僚、さらに医師、弁護士、作家、大学などの教師です。彼らの意識をまとめ、世論をつくっているのがマス・メディアとその関係者ということになります。

チャベスは十七歳で陸軍士官学校に入り、一九七五年工兵科を卒業した軍人です。少尉として任官したあと高級軍人養成学校に入り、そこを出たのが一九八〇年です。この当時、ラテンアメリカは米国に支援された軍事クーデターが続発し、軍事政権が支配した時代です。彼は学生時代パナマのトリフォス将軍、チリのアジェンデ政権に関心をもっていました。

トリフォスは軍事クーデターで権力を奪取したけれど、民族的で民主的な「開明」者で反米政策を実行しつづけたのです。ラテンアメリカでは軍部が人民の側に立つことはけっして少なくなかったのです。他方、チリではピノチェト将軍がアジェンデ政権を血の海に沈めたことはだれもが知っていることですよね。

チャベスは軍が国民から離れた存続であってはいけません。シモン・ボリバルの理想を実現できないかと、軍隊内で組織化活動に着手し、MBR二〇〇（ボリバル軍二〇〇）という組織を仲間の将校とともにつくったようです。一九八〇年代はじめてのことです。

## 反乱そして投獄

ラテンアメリカはこの時代ピノチェトの軍事政権を契機に、国有化された企業、国営企業を民営化、株式会社化し、株式売却益で天文学的にふくらんだ借金返済に当てることをもくろんだIMFの管理下におかれ、いわゆる「新自由主義」政策の実験がおこなわれつつありました。ベネズエラでも例外でなかった。ベネズエラの富の源泉である石油は一部支配者と米系大石油会社の思うがままに搾取、収奪されつづけ、国民の大圧倒大部分は極貧下にあつたのです。

カラカソン（地名）で大暴動が起きたのは一九八九年のことで、軍部は大弾圧をお

こなつた。チャベスは軍内での組織化を強め革命的ボリバリアーノ軍と名称を改め市民、市民運動との連携をもさく。「反乱」の準備に入ります。軍事蜂起したのは九二年二月四日です。だが失敗、投獄されます。

チャベスがこの時、連携したのはカウサRという政党でした。チャベスは「カウサRが裏切った」といっています。ここらのところは、すべて秘密裏におこなわれた活動ですから、本当のところはよくわかりません。軍隊内にあつてMBR二〇〇に共鳴していた軍人は約六千人、チャベスはこの時大隊長（中佐）で二〇人の将校と五〇〇人の兵士の指揮官でした。

### カストロ、そしてチャベス

ベネズエラで国民の怒りは燃え上がる傾向にありました。政治運動も活発化しました。カウサRにいた政治家たちは一九九三年の大統領選挙にチャベスを利用し、彼を「英雄」にしていきます。その間の動きは複雑でこれまた理解するのはむづかしい。カストロが一九五三年七月二六日にモンカダ兵営を襲撃し、失敗、捕らわれの身となり「歴史は私に無罪を宣告するであろう」との法廷での演説が、カストロをキューバの英雄にし、当時の軍事独裁者バティスタが彼を殺したかったけれど釈放せざるを得なかったこととよく似ているように思われます。

カストロは釈放後メキシコに亡命。五六年、ゲバラとキューバに入りゲリラ戦を開始する。キューバ革命はそれから三年後の五九年一月一日です。カストロの場合、ゲリラ戦というたかいかい方が国民の支持を集め、権力を掌握、そしてパニコミュンでコミュン労働者が無意識的に実践した社会主義的方策を実行しつづけ、きわめて困難な国際情勢下でありながら社会主義を実行しつづけています。

チャベスは武装蜂起の失敗から①蜂起の目的は正しかった、②大衆の支持を得られなかった、③軍内での運動は不可能になったと、武装闘争（武力革命）をやめ「大衆の中に入る」（平和革命）を実践します。九三年以降のことです。彼は全国を行脚し、地域からの大衆組織である「ボリバリアーノ委員会」をつくります。彼は運動の組織化の目標に平和的な道である選挙運動で「共和国の大統領選に勝利し、人民に権力をもたらし、憲法制定議会を組織する」道を選んだのです。

### 「憲法制定議会」制定かかげる

ラテンアメリカ諸国は大統領制。これは首長（しゅうちよう）制というインディオ社会の伝統、軍の頭領による独裁政治「カウディリヨ主義」、それに大統領を権力者とした米国の植民地主義の影響などでつくられた政治体制です。「米・ソ冷戦体制」が終わってから、旧ソ連・東欧諸国が大統領制を選択したことでも明らかです。議会はある。しかし大統領が最大の権力者として君臨するのが、この制度の大きな特徴。

彼はこの大統領制という制度を利用して、「憲法制定議会」制定を主張して、大統領選挙に立候補。九八年十二月の大統領選挙で勝った。得票率は五六％だった。軍人

から政治家に見事に転身したのです。しかし、彼は元軍人で、クーデターの張本人。「軍事独裁者をねらっている人物」と当選直後から今日にいたるまでもその非難は絶えません。軍政に痛めつけられた中南米諸国ではとくにそう。

ラテンアメリカでは植民地時代はまずスペイン軍とスペイン貴族、次いで一九世紀初頭シモン・ボリバルという植民地生まれの白人がスペインを追い出しگران・コロニアをつくってからアメリカの植民地下で軍事独裁政権がつづいてきました。軍事政権から民政に変わったのは一九八〇年代末からにすぎません。日本でもそんな主張は強い。彼は軍人上がりだ、政党もない、社会主義なんて「タワ言だ」と。ぼくも二三年前まではそう思っておりました。しかし、見方が少し変わった。ついでその理由についてチャベスの思想基盤とその発展から考えてみたい。

### 「ボリバル革命」

すでに述べたが、チャベスが大統領に当選したのは、一九九八年十二月。チャベスはただちに制憲議会召集の国民投票を呼びかけ、一九九九年七月制憲議会選挙で制憲議会が成立、旧議会は解散されました。制憲議会は新憲法を起草し、十二月に新憲法が国民投票で承認。新憲法はまずベネズエラ共和国との名称を「ベネズエラ・ボリバル共和国」と変えました。「ボリバル」とは何かです。ボリバルはラテンアメリカ独立の英雄、建国の士シモン・ボリバルです。

ラテンアメリカは今いうグローバリズムの日本の地域です。コロンプスがこの地に到ったのは一四九八年八月、冒険航海時代に独自の文明を育てていたマヤ、アステカインカがグローバリズムの波に飲み込まれ、スペイン軍によって、植民地化され壊滅させられてしまいます。原住民（インディオ）は殺しつくされてしまいました。わずかに生き残ることができたのはアンデスの峰に住むわずかな人たちだけ。スペインの植民地時代は一九世紀はじめまでつづく。この地域を支配したのはスペイン本国から派遣された貴族たち。当時の階級構成はスペイン本国の貴族が支配階級として君臨、現地生まれの白人、白人とインディオとの混血であるメスチソ、そしてインディオが被支配階級としてありました。

シモン・ボリバルはラテンアメリカ生まれの白人で、彼はスペインの支配とたたかい独立を勝ちとつたのです。その時、彼はگرانコロンビア共和国をうちたてます。この地域は今のコロンビア、エクアドルそしてベネズエラを含んでいます。ボリバルはスペインに対抗するため中米・カリブを含む南米諸国が一つの統合された軍隊、一つの経済モデルをもった「諸国家の同盟」を提唱したとされます。チャベスはこのモデルを現代という時代の中で実現したいとしますのです。

### ALBA（米州ボリバリアーナ同盟）

ラテンアメリカは国土は豊かだ。しかし、新自由主義・民営化政策で米国、国際金融団体（世界銀行・IMF）による経済支配がいちじるしく強められた。いわゆる

「構造調整」です。貧しい民はますます貧しくなり、貧富の差は拡大する。土地は不在地主が独占するところとなり、自由に耕すことはできない。

大発展をとげているというメキシコ、ブラジルでも行ってみればわかるが、都市はスラム街に取りまかれている。豊かな人びとは警備員を雇い、邸宅は二重三重にバリケードが築かれるほどにすさまじい。アンデス諸国についてはいうまでもない。

アンデス諸国とブラジル、そしてアルゼンチン等を含むパンパス地帯は植民地化の過程は大きく異なります。アルゼンチン等は一九世紀以降、ヨーロッパからの出稼ぎ労働者が小麦、牧畜業にたずさわった。ブラジルは綿、ゴム、コーヒー等のプランテーション農場だ。そこに労働力として黒人が利用された。だから、ブラジルには黒人、黒人と白人の混血であるムラートが多いのです。

原住民が多いのはアンデス諸国でペルー四五％、エクアドル二五％、ボリビア五五％、ベネズエラは白人二二％、メスチソ六六％、黒人一〇％、インディオ二％。こんな人口構成の下、一九八〇年代から進んだ軍事政権から民政への移行のなかで、しいたげられつづけてきたインディオを中心とする絶対的貧困下におかれた層が自覚を強め、組織化され、政治的な力となってきた。ボリビアなんてとくにそうだし、ペルーでガルシアの対抗馬として大統領選に出馬したウマラもそうです。今、罪人としてチリで幽閉されているペルーのフジモリ―国民新党が比例区候補の一人とした―は「自分は移民の子、日本人とメスチソの混血だ。貧しい者の味方」と原住民を支持基盤としたことは周知のことです。

中南米諸国は新自由主義の実験場とされました。その結果、国のすべての富は大企業と先進国が思うままに荒らされてしまいました。ラテンアメリカの貧困のもっとも大きな原因です。貧困、失業、負債克服には一国では負ける。力をつくるためには共同で対処することが必要と、彼がもつとも力を入れるのがALBA（米州ボリバリアーナ同盟）です。

（つづく）

## 自民支持基盤「崩壊」明らか

―〇七参院選の結果から―

### 〇五衆院選そして〇七参院選

小泉純一郎は「自民党をブツ壊す」といって並のタレントには及びもつかぬ人気を得た。言葉どおり小泉は自民党支持基盤を破壊しつくした。典型が〇五年八月の「郵政選挙」である。地域社会崩壊を加速させるこの政策を、マスコミは「改革」と賞賛群れて流れた国民は与党（自民・公明）に、三分の二もの議席を与えた。つい二年前のことである。

七月参院選はこれと正反対の結果となった。自民惨敗、民主大躍進である。自民は二七議席を減らし三七へ、民主は三八議席をふやし六〇に倍増した。この結果、二院

制の議院内閣制をとる日本で衆院は自民、参院は民主が第一党となり、与党・野党が二つの院で対抗する政治状況がつけられた。参院に比し、衆院が優位である。予算、条約等衆院優位の法案を除き、国会での法案審議と通過は「一丁上がり」の強行採決は困難となる。

参院には解散制度はない。だから、衆・参の「対立」はこれから三年つづく。「自民惨敗」の選挙速報のなか、アホウでマヌケなボンボンは、TV局を梯子（はしご）しながら「統投」を叫んだ。参院選は政権選択の選挙じゃない、憲法改悪は公約、だから今やめられないが表向きの理由だ。だが、「安倍をやめさせない」自民党の思惑は別のところにある。安倍辞任で我が党はさらに混乱、壊れるとの内向きの政治判断である。進も退くも地獄、今回は安倍で突き進もうと。

## 二一世紀臨調の暗躍

選挙になるとマスコミは勢いづく。評論家連中にとつては、最大の稼ぎ時で「売らんかな」の報道が宙に舞う。今回のマスコミの報道合戦はこれまでと姿・形を変えた。朝日が典型だが二一世紀臨調（新しい日本をつくる国民会議）と協調し、毎週のように自民か民主かの世論調査を実施し世論透導をおこなった。

二一世紀臨調とは財界（日本経団連）、労働界（連合）を中心に官僚、政治家、学者・知識人、マスコミ、NPO等の社会上層部が寄り集まり「戦後憲法体制の包括的見直し」を検討・実行する国策機関である。ちなみに、小選挙区制導入、マニフェスト政治導入で二大政党制を推進したのもこれである。

「自が民が」とこれでもかこれでもかと喧伝された。共・社、他の小政党、国会議員をもたぬ党は追いておかれる。共産は二減らし三に、社民は一減らし二となった。憲法改悪に反対する政党の議員は参院二四二議席中共産七、社民五、無所属一のわずか一三である。

## 「三点セット+α」―八九年と〇七年

自民が敗けることはだれもが予想した。だが、こんなに敗けるとは。一人区で六勝二三敗が象徴である。これと同じことが一九八九年参院選でもあった。この時の状況をつくったのが「三点セット+α」―農業自由化・リクルート汚職・消費税導入、ウサギ小屋・働き蜂との労働者生活Ⅱだった。中曽根の国鉄分割民営化に代表される国営企業の民営化、規制緩和が、厚くて広い自民党支持基盤を突きくずし、自民党支持者の反乱となり新しい時代の到来を告知したのだ。

グローバリズム、規制緩和、大企業生き残りのための競争政策は橋本内閣で国策化され、ルンペン宰相・小泉は「自民党をブツ壊す」と叫び実行した。国民は小泉にたぶらかされた。安倍は奇人、変人でなく凡人だ。この凡人は岸信介、安倍晋太郎というじいさん、おやじの「憲法改悪」だけを受け継いでいる。「美しい国」とは、天皇が統治する国柄であると。

安倍は選挙の争点に「歴史・伝統・文化」を基本とする教育、憲法改悪をおいた。政治状況は安倍の思惑とは違った方向に走り出した。新たな「三点セット+α」である。年金問題、政治とカネ、失言問題であり、国民生活の格差拡大である。大企業生き残りの自由競争政策―その具体策が規制緩和策―は地方、農業、小零細企業、小工業者を切って捨てる。都市と地方の格差は拡大するばかりか、地方は生きてゆけなくなる。自民党はそれの支持基盤を「改革」との扇動で切り捨てつづけた。

## 二大保守党で投票行動に安心感

日本では首相は都市ではなく地方から出ている。例外は小泉くらいであろうか。産業構造の変化、地方人口・経済力の低下はこれまでの公共事業に景気波及力をなくすことになった。新たな公共事業となったのが、国営企業の民営化、土地売却、環境に名を借りた都市再開発である。地方での公共事業は必要なもので切り捨てられる。これじゃ、地方は生きていけない。小沢一郎はここに目をつけた。「政治は生活」と、これまで自民党の支持基盤だったこれらに切り込んだ。民主二三勝六敗の背景である。安倍君は本当にアホウでマヌケだ。事務所経費問題で頭がまっ白になった赤城君は、ハレ物治療のバンソウコウにも疑惑を抱かせる答弁ぶりなのだから。続出するスキヤンダル、失言に国民はさらにあきれはて、「安倍さん、おやめになったら」と民主党に「安心」して投じたのだ。

自民、民主に政策的に違いはない。選挙民は、己れの利害にしたがって自・社体制時代のように深く悩み、考えることなく自民から民主に乗り換えることができる。何か一つの大きな政策上の争点、スキヤンダルで投票行動は移り変わる。これが二大政党時代の選挙の大きな特徴である。財界や分け知り顔の二一世紀臨調に集まる学者・知識人はマニフェスト政策による選挙、投票をといて。政策に違いがないのにどうして選べとていうのか。政策遂行の結果こそが選挙の争点ではないのか。二一世紀臨調のマニフェスト政治はごまかし、欺瞞(ぎまん)である。

## 二一世紀臨調の“ささやき”

共産、社民は「憲法九条」を政策の柱とした。九条ネットのように憲法だけでたった会派もある。その主張は正しい。しかし、彼らは選挙のテーマをつくり出すだけの力はない。選挙のテーマは大きな二つの保守党によってつくり出される。

憲法はいずれ大きなテーマとなる。だが、改憲政党である二つの保守党は大きなテーマ―国民世論が二分されない―にならない状況づくりに知恵を絞ることにする。安倍君は憲法をテーマとしたかった。小沢君は民主の党内事情から避けた。避けられる条件を自民はつくってしまった。「三点セット」であり格差だ。これによって、民主は自分でも驚いた勝ちを得た。

二一世紀臨調にたむろする輩どもは民主に「政策をねり合わせよ」「大連立も」とささやき始めている。

(滝野 忠)

# 何としても勝利をつかむ！

―五月・六月行動から最終局面の闘いへ―

## 国交省を攻めぬく

五月・六月は国土交通省正門前での統一行動を展開し、五月一〇〇〇人、六月一五〇〇人の延べ二五〇〇名の結集を得て、最も解決を妨害している国交省鉄道局に迫った。

五月、六月の統一行動の成果は、①四者・四団体の団結、とりわけ解雇された当事者四者の結束を内外に知らしめたこと。②当事者である四者が、交渉の主体であり、そこを飛び越えて、この紛争は収まらない事を官僚に向けて発信できたこと。③座り込み・宣伝行動を背景に、要請や請願法を駆使した請願行動で国交省・鉄道局に迫り、攻め上げた。これらの行動で国交省内部からも鉄道局の対応のまずさに対する批判の声を上げさせた事。④要請行動を通じ、鉄道運輸機構は、当事者としての認識を明らかに表明したものの、一方の国土交通省は、原告らの行動の一つひとつを取り上げ、口を極めて非難した。こうした対応の違いから、その温度差を浮き彫りにし、仕掛けに失敗したはずの「四党合意」に今尚未練を残し、その延長線を外れたところでの解決は徹底的に妨害するという国交省・鉄道局の思惑が透けて見えてきた。

それは、「四党合意路線のデッサン」は国交省が描いた国労解体・総仕上げのシナリオであったことを国交省自ら吐露したと思えるリアクションであり、特筆に価する。何故ならば、解決の最大の妨害勢力である国交省・官僚の思惑を、その対極の闘いで打ち崩した時にこそ、二〇年に及ぶこの紛争のゴールがはっきりと見えてくるからだ。

## 控訴審の流れ 八／三一次回弁論決定

鉄建公団訴訟控訴審は、東京高裁第一七民事部に係属し、〇六年一月二〇日、〇七年二月五日の二回公開法廷で控訴審が行われ、四月一日、六月二九日は非公開の進行協議が東京高裁第一ラウンドテーブルで開かれた。

それらを経て、控訴審の次回期日が八月三十一日、一時から東京高裁一〇一号大法廷で弁論が行われることに決定した。六月二九日は、進行協議を終えてから、夜の報告集会で今後の闘いに向けて全力をあげて行くことを決意しあった。

## 六・二九進行協議報告集会

六月二九日夜に東京しごとセンターで行われた報告集会で挨拶に立った二瓶議長は、五月・六月行動を振り返って「国交省攻めで相手を追い込んできた。むこうは正門前行動を相当気にしている。こちらの要求は『雇用・年金・解決金』だ。年内の闘いが大切。全力を上げて闘い、政治解決に結びつけよう。」と述べ、今後の闘いとして、解雇された当事者が前面に出て取り組む九月の国交省に向けた闘争と、一月末の全

国集会への決起を呼びかけた。

連帯挨拶では、全動労争議団の森哲雄事務局次長から「七月二五日は、全動労争議団の訴訟も結審日を迎える。裁判闘争と大衆闘争の結合で迫力ある闘いを組もう。」と述べ、四者の強固な団結を更に高める事を訴えた。

一問題提起で萩尾弁護士は「高裁の南裁判長は進行協議でじっくりやらせてくれる姿勢を示した。こちらの進行計画は因果関係の立証で、他に劣るものではない、採用されて当たり前との積極的因果関係論、国労を脱退すれば採用になったとの消極的因果関係論、卑劣な策動により処分されたとの処分論、そして予備期日をとるよう裁判官に主張した」と述べ、「次回（八／三一）まで処分論を出し、次々回期日まで、残りの主張を全て出し切る。」と進行状況と決意を語った。

同時に並行して進んでいる二次訴訟にも触れ、「被告側は反論あるなら出せといったら証拠として新聞記事を出し、JRになり、収入が伸びた、スイカはすばらしいなどと主張。分割民営化に反対したものは不採用になって当然といっている。これらに対する反論をしっかりとやる。」「原告は、もう一回闘志を燃やし陳述書を作成すること。弁護団は夏休み返上で書面作りをする。」と力強く弁護団としての決意を述べ、それらを包む大衆闘争への決起を促した。

この後、土屋とかちさん製作の「労働者は奴隷か！」（二〇分）を上映、高根弁護士、大口弁護士、萩尾弁護士が登壇しての弁護団アピール、会場発言と続いた。「分割民営化の負の部分は大きい。そこをしっかりと広めることが大切。」「サッチャー、レーガンより先に岸信介が分割民営化を仕掛けていた。新自由主義のもとでは日本でないか」など、熱のこもったやり取りが続いた。

酒井原告団長の「四者を窓口に、今後行動の中で押し込んで行く。裁判をしっかりと闘い、控訴審の日程を視野に入れ、四者は前面に立って闘う」との決意表明と、国鉄闘争共闘会議星野副議長の「最終局面が始まった。五月六月行動で切り開いた闘いの到達点を生かし、二〇年の節目の闘いに決着をつけよう」とのまとめと、団結ガンバローで報告集会を終えた。

### 控訴審これからの展開

今後の控訴審進行は、前述の萩尾弁護士の報告にあるように、原告が八月三十一日の期日と、その後設定されるであろう期日の二期日を使い、積極的因果関係論・消極的因果関係論・処分論などの主張を全面展開することになり、被告側が反論してくる期日及び、それに対する原告再反論などを含めても、年内にあらかたの高裁での攻防が終了する予定だ。この裁判進行は、原告の意向を反映する流れになっている。

現在、原告は控訴審に向けた陳述書の最終仕上げの時期を迎えている。「いかに優秀な職員であったか」「日夜、線路を守り、業務を全うした」事などの積極的因果関係論、「こんな奴でさえ、国労を抜ける事によって採用された」などの消極的因果関係論、「受けた処分は、国労つぶしを狙った意図的な目的で行われたもの」との立証

を行う処分論を柱とし、いかに理不尽な不当労働行為が行われたかを明らかにするものだ。

### 秋から年末までの闘いー解決への流れは、自らの運動で

法廷闘争を支える大衆闘争として、原告ら四者は、結束して夏から秋、そして年末に向かったの詰め、闘いに全力を注いで行く。鉄道運輸機構と四者による交渉を積み上げるのはもとより、全国集会を一月に設定し、八月から一〇月にかけて地方集会を組み立て「全国連鎖集会」として、地方からの運動で、全国集会に人を寄せる機運を盛り上げていただきたい。

また、国交省が相変わらず頑なな姿勢を改めない時は、第三弾として、九月統一行動（日程別途）を配置して、徹底的に鉄道局を攻め上げる。また、「鉄道の日」の記念日である一〇月一四日には、中央・団結まつり（東京・亀戸中央公園）を行う。これら一連の運動のエネルギーを総結集させて、十一月三〇日には、日比谷野外音楽堂で全国集会を開催する。これまで多くの集会で汗を流していただいた関係者の知恵をお借りし大成功させたい。会場の狭さは、会場外に野外モニターを配備しカバーする予定だ。

当事者である四者は、一〇四七名問題の全体解決に向かって二〇〇七年後半の闘いに死力を振り絞って事にあたる覚悟だ。解決への流れを原告当事者は闘いの前面に立って、自らの運動で引き寄せる、そうした決意と気概をもって全力を出し切ろう。すべてのエネルギーを燃焼させ年末までの闘いに爆発的集中力を傾注しよう。

（二〇〇七年七月二三日 原告団中央協議会 事務局長 佐久間 誠）

### JR西日本 尼崎事故はやはり運転手の責任！

二〇〇五年四月、一〇七（一〇八）人が死亡した尼崎JR脱線事故で、事故原因についての調査結果をまとめた国土交通省・航空鉄道事故調査委員会の最終説明会が七月七日午後、川西市「みつなかホール」で開催されました。

遺族と負傷者二七二人が出席した説明会では、JR西日本や国の責任に言及していないことへの抗議の意見や、JRへの厳しい指導を求める要望などが出されました。今回で三回目となる説明会では中桐宏樹首席調査官らが、事故の主原因となったカーブでの大幅な速度超過について、直前の伊丹駅でオーバーランした高見隆二郎（死亡当時二三歳）運転手が、車掌と輸送指令の無線交信に聞き入るなどしてブレーキが遅れた可能性が高いなどと責任転嫁をする一方で、ミスした運転士に課される「日勤教育」という異常な労務管理に対してはうやむやにしたままでした。

遺族から「危険性についての認識の甘さが事故を招いた」「安全切り捨て利益最優先のJRの体質こそ問題だ」などの意見が出されました。七時間にも及んだ事故説明会に、遺族が納得できないのは当然です。

事故当時の幹部は何食わぬ顔で天下り、のうのうと余生を謳歌している一方で、被害者のせつない想いを軽々に扱っている現実：それを許しているのは、会社や社会の不条理にチェック機能を喪失した「ロウドウクミアイ」の実態です。

## ◇ 読者からのおたより ◇

飛行機に乗ることはないバスは毎日や！ 熟年者ユニオンは、神戸市がバス有料化の動きに、三宮センター街東口周辺でマイクとビラを配布で宣伝しながら署名活動を行いました。署名活動での市民から「市がそんなことを考えとんか。知らんかった」、「神戸空港みたいなもん造るからヤ」、「飛行機にはこれからも乗ることないが、バスは毎日ヤ」など、多くの声が聞かれました。関心が高いこともあるのか、署名数は一時間ちよつとで二二一筆の協力。『しあわせの村老人カレッジ』の人が「五〇枚ほど用紙をくれ」と持ち帰ってくれました。 (神戸・熟年者ユニオン)

編集部より 兵庫各地に支部が増え、会員も拡大中とか。組織づくりの一つですね。読者ふやす たいへんご苦労さま。学習資料として活用します。住所下記に変更して下さい。購読者を増やします。 (北海道・S)

編集部より お元気な由なによりです。お会いしたい。読者ふやして、よろしく！誌代おくれゴメン 送金が遅れすみませんでした。読者の方が入院された関係もあり、集金遅れてしまいました。とりあえず九月まで送金します。今後ともよろしく。 (新潟・O)

編集部より 送金に感謝。どこに行っても健康問題が話題に。Oさんもご自愛を。ウンとたいへん 一部減です。年内に回復の取り組みをします。「九条ネット」、とりわけ栗原さんの当選にがんばります。でも東北、うんとたいへんです。 (山形・C)

編集部より 多く取り扱っていただけて心から感謝。参院選後にうかがいたい。さらになんばつて 一千号とともに三十周年のご苦労に敬意を表します。今後とも日本の民主主義運動と労働運動の指針となることに期待いたします。 (東京・Y)

編集部より 一千号、三十年には多くの読者からお祝いと激励いただきました。感謝。編集部より 「国労らしさ」 何を「和解」したんだか判らないけど、職場では「国労らしさ」がまったくなくなり： (NRU上野・S)

編集部より 国鉄闘争は日本労働運動の柱の一つ。弱気はいけません。稲村さん この人の文はとて面白い。具体的、階級的で明晰。滋賀県は凄いい。嘉田由紀子知事の行政と、自・公を半数割れに追い込んだ。新幹線の新設駅は本当に「もったいない」。まさに日本は土建政治で、その悪しき見本は保守王国、茨城だ。コムスンが問題になっているが、土建・不動産屋は初めはアパート、次は大型書籍店、そして「介護施設」やグループホームだ。ゼニになることなら、イノチや老い、ボケまで食いものにする。福祉国家、「美しい国」などへソが茶を沸かすぜ。隣家の芝生はあおく見えるというのが、滋賀は本当に緑いのだ。 (茨城・元教師)

編集部より 中村、丹生、そして農林大臣。茨城つて？ 六・三大集会 筑豊労災病院守る会 筑豊労災病院を存続、充実し、地域医療を守る会の第四回総会が六・三大集会として開催されました。筑豊労災病院は、筑豊炭田で多発した炭鉱災害の被災労働者の治療と早期社会復帰をめざして、労働省(当時)が開設した病院で、一二診療科二五〇床で救急体制の病院で平成一九年度廃止予定になっていました。筑豊労災病院は飯塚市に委譲され、飯塚市立病院となることが決まりました。今、新病院のスタートに向けて飯塚市議会で議論が進められています。しかし、筑豊労災病院の現状は、医療水準の低下に歯止めがかかっていません。今年四月に整形外科は再開されましたが、診療体制が新たに縮小された診療科もあります。七月にはじん肺専門医が不在となりじん肺の救急には対応できなくなり。 (三池CO)

夏季物資販売 七月二三日から八月三日の二週間、音威子府闘争団の夏季物資販売を行います。闘う会第六回総会はさんでのとりくみです。 (新潟・闘う会)

編集部より 「守る会」「闘う会」のニュース、定期的に出されている地域・地区は少なくなり、ました。さらにご活躍を。物販、地震で、ご苦労されたのでは。